

## トピックス

# ギリシアにて

成蹊高等学校

桂 正人

(003) 世界史 B 執筆者

ギリシアは、7月のサッカーヨーロッパ選手権で優勝し、8月にはオリンピック、9月にはパラリンピックを開催した。この夏はギリシアを身近に感じた生徒も多いはず。情報も格段に増えた。とはいえ、古代ギリシアとギリシア独立を中心に世界史や倫理で学ぶ範囲を超えることは稀で、現在のギリシアについての知見は少ないことであろう。筆者は1983年から3年間、学生としてアテネ住まいをし、昨年の4月からは研修で1年間、再びアテネで下宿住まいをした。滞在当初はあまりの異文化ぶりにカルチャーショックの連続だったが、慣れると日本での生活に違和感を覚える逆カルチャーショックも体験した。学問的なことは他書にゆずり、ここではいくつかのトピックスを通じて、ギリシア人の生活の一端を紹介したいと思う。

### 「言い張ったもの勝ち」

ギリシアの諺で、自己主張しないと何ごとにも通らない、といった意味である。

2003年、米軍のイラク侵攻が始まった直後の4月にアテネ入りした。3月は週末になるとアメリカ

大使館への大規模な反戦デモが巻き起こっていたという。ギリシアもデモが頻繁に行なわれる国である。なにせ子供のときから親に連れられて練り歩きし、場合によっては他国にも押しかける。小規模なものから、市の中心部を埋めつくすような大規模なものまで、ある政策に賛成するデモ、反対するデモ、さまざまな勢力がデモに訴える。昨年は国立病院の医師、小学校から大学の教員が賃上げを要求してストとデモを繰り返した。あおりでアテネ大学の卒業式が延期された。また、危険手当の支給を要求した警察官がデモを行ない、出動した警察官との間でもみ合いとなり、なかに警棒で殴打されて頭から血を流す制服姿の警官まで出た。

初夏、『古代民主政とその遺跡』というアテネ市主催の市民講座でブニクススの丘（国会議場遺跡）に出かけた。デモステネスらも登った演壇で、言論の自由について語った後に講師が述べた「何しろカイロネアで失った民主政治をわたしたち市民が取り戻したのは18世紀以降のことなんですからね」という言にハッとした。ギリシアは独立以来、戦争につく戦争の歴史を引きずっている。バルカン戦争、第一次世界大戦、ナチスによる占領とレジスタンス、続く内戦の深い傷は、今なお家庭でも学校でも語り継がれている。

ギリシア人のデモ行進は人が集まることを前提とする民主政下の自己主張のあり方、選挙時以外の意思表明の場として確立しているのである。

ギリシア人には表裏がなく、建前と本音を使い分けることがない。初対面の相手でも平気で給料や年金の額を聞いたりする。議論になると自分の主張を相手の言うことも聞かずにゼスチャー入りでまくし



写真1 延期されたアテネ大学卒業式



写真2 ナチス占領軍によるカラヴリタ村民処刑地

立てる。喧嘩としか思えないような形相と身振りでののしりあう。日本でこんなことをしたら二度と口をきいてくれないだろうと思うほどだが、本人たちはその場その場で言いたいことを言いあっているだけで、いつまでも感情を害したりはしないということだ。翌日には電話を掛けて来て、前日の口論など覚えてもいないといった調子だという。根に持たない性分である。さすが弁論術と詭弁発祥の地で、言いたいことを言う分、ノーストレス社会である。

テレビのニュース番組になると、トピックスごとに関係者が出演し、相手の主張を音量で封じ込めようとするかのような罵声がかぶさったまま放映される。主管の大臣が電話でこれに割り込んできたり、ときには交通整理役のキャスターまでもが、自分の主張をまくし立てる。何とも凄まじい光景である。こうした中では、日本男性が得意とするニヤニヤ優柔不断顔は、大いに誤解される。

2003年の前半はギリシアがEU議長国で、これに関連していくつか重要な会談が開かれた。新たに10ヶ国が加わった拡大EUの発足式、ジスカール＝デスタン元フランス大統領のEU憲法草案会議、そしてキプロス問題などである。拡大EUの調印式は、直前になって休日扱いとなり、復活祭明けの抜けるような夏空の下で行なわれた。ちなみに、昨年夏の気候変化もいかにもギリシアならではのものだった。4月の復活祭までが暖房、復活祭以降は冷房という極端なもので、夏から冬へは、9月3日の夕刻に雨が降り気温が一気に10度下がって、人々のあいさつも「よい冬を（カロ・ヒモーナ）」に変わった。トゥーキューディアースが『戦史』を夏と冬に分けて記述したのもなるほどというものだ。

調印式は古代アゴラ遺跡内に復元されているベルガモン王国の最後の王アッタロス2世が寄贈したストアで開かれた。テレビ中継を見ていたが、各国の首脳がアクロポリスからパナテナイア通りを降りてきて、ストア前で待ち構える当時のシミーティス首相とパパンドレウ外相と握手するという演出である。どこの首脳だったか「古いヨーロッパですね」とラムズフェルド発言を皮肉ると、シミーティス首相はすかさず「新しいヨーロッパでもあります」とにこやかに応じたのが印象的だった。同じ頃、アテネの中心シンタグマ広場で反EUデモ参加者の一部が道路に火炎瓶を投げつけている様子も中継された。

EU憲法についての会議はテッサロニキ郊外で開

かれたが、この時の反EUデモはヨーロッパ中から参加者があり、寝泊り用のテント村作りが進められている様子がニュースで伝えられた。会談当日になると、テッサロニキ市内で暴動が発生し、外国人や高校生を含む多数の逮捕者が出た。

### シンプルライフ

そもそも学校を意味するヨーロッパ語（英語のスクール、独語のシューレ、仏語のエコール、伊語のスクオラなど）は、古代ギリシア語のスコレーが語源。時間に関しては「余暇」を、空間に関しては「余白」を意味する。学校に集うのは、ビジネスマン（ビジネスマン）の正反対ということだ。

ギリシアはかつてオリンピックの恒久開催を主張していたが、結局各国持ち回りとなった。当初は万博のアトラクション扱いされたこともあり、20世紀初頭にはアテネで特別大会が開催されたこともある。これをカウントすれば、今回は第3回アテネ大会である。オリンピック100周年にあたる1986年大会に向けてアテネは招致運動を行なったが、このときはアトランタに白羽の矢が当たった。アテネの「平和と友好スタジアム」はそのメイン会場を当て込んで1982年に建設したものである。しかし、ようやく願がなまった今回のオリンピックでは、施設の整備は遅れに遅れた。開催1年前のアテネ市民のオリンピックに対する心構えは、意外とさめていた。「明日できることは今日するな」を旨とし、「土壇場まで行動しない」ギリシア人の性癖は、この国際的イベントでも変わることはなかった。それでも、最後は突貫で何とかしてしまうのがこれまたギリシア人。左右問わずナショナリストというお国柄なので、メダルでも取れば熱狂するだろう。

ギリシア人はよく「われわれは人間だ」という。この言には「非人間的なことを突きつけないで」という思いが込められている。下宿近くのスヴラキ（焼鳥のような肉の串焼き）屋のおかみさんも、よくこの言を口にしていた。「これ以上焼けないのよ。せかさないで」という意味である。

公務員の勤務時間は午前8時から午後2時。もちろん週休2日制。アテネ市は渋滞緩和のためにゾーン制を敷いて、曜日によってナンバープレートの番号が奇数か偶数かで中心部への車の乗り入れを制限しているが、午後2時過ぎに大きな渋滞が訪れるのは彼ら（教員を含めて）が一斉に退勤するからである。夏は、サマータイムと経度の関係で、午後9時

にならないと暮れてこない。昼寝の習慣シエスタ（ラッシュアワーが日に4回あった）も都市部ではすたれていて、帰宅後に昼食を取り、ひと休みしてからカフェに出かけ、集まった友人たちとおしゃべりする。この夕刻のコーヒータイムが長い。その後、映画館に繰り出したり、広場や公園をそぞろ歩きしたり、とにかく家にはなかなか戻ろうとしない。休日には海水浴だ。

男性の年金生活者には、ギリシア独特のカフェニオという社交場がある。コーヒーやビール、ウーゾ（ブドウの絞りかすで作る蒸留酒）を飲みながら、気の置けない仲間と、テレビを見たり、カードゲームやバックギャモンに興じたりして時を過ごす。広場（アゴラでなくプラティアという）には数軒のカフェニオが並ぶ（旅先で道に迷ったり、宿の情報に困ったときなど、暇をもてあましてこのカフェニオおじさんたちに相談すると必ず助けてくれる）。

日が暮れると、共働きのほとんどのギリシア人は広場近辺のタヴェルナ（食堂）に繰り出し夕食をとる。日没後の涼風を受けながら、ワインやビール片手に素朴なギリシア料理を食べる。店は客が回転するのを期待しない。小さな子供たちの鬼ごっこやサッカーの歓声につつまれ、広場の夜は静かに更けていく。

夏休みになるとアテネっ子は、実家のある海や山に出かけたり、観光客の来る島に出かけて冬に閉鎖していたホテルなどを開けて営業するため、アテネは空になる。オリンピックをわざわざ夏休みに実施したのは、学生ボランティア動員とアテネの渋滞回避、さらにギリシア人の暑さにたいする耐性、これが理由だろうか。

### ギリシア語

ギリシア語はミケーネ文明以来の3000年を超える歴史ある言語である。文字も線文字B消滅後に、フェニキアから学んでアルファベットを考案して以来、ほぼそのまま。日本の大学では、古典ギリシア語講座こそ設置されているが、現代ギリシア語にいたってはどこの大学にも学科はないし、授業さえ稀であろう。大都市の市民文化講座に少しある程度。母国語とする人間がディアスポラのギリシア人を含め2000万人以下というマイナーな言語ではあるが、詩人セフェーリスとエリーティスがノーベル文学賞を受賞しているし、それなりに重要な言語である。アテネ大学で日本語講座に150名もの学生がひしめ



写真3 作家シンポジウム

いているのと対照的である。

今年の2月初旬、アポロン神託で有名なデルフォイ遺跡に隣接するヨーロッパ文化センターで、ギリシア文化と関係の深い作家を各国から招いたシンポジウムがあった。ノーベル賞作家アイルランドのシェイマス＝ヒーニー氏や日本の池澤夏樹氏（氏はかつてギリシア滞在が長く、アンゲロプロス監督との親交も深い）などが列席した。その席上、ドイツの作家が「現代ギリシア人と古代ギリシア人は別である」と発言した。それを聞いていた筆者は、「わっ、やった」と思いきや、やはりギリシアの作家やフロアから猛反発が始まった。曰く「現代ギリシア人にはスラヴ人の血が入っているだろうし、他の民族の血も入っているだろう。また、古代ギリシア人の到達した文化レヴェルを今日維持しているとはいえない。しかし、ギリシア人とは何か、という問いには、ギリシア語を母国語としてその言語で語られた文化を継承する人間としか答えようがない」という主張であった（1923年のローザンヌ条約でトルコ・ギリシア間の住民交換が行なわれた際、ギリシア人であるとの認定は言語ではなく宗教によった）。

筆者は現代ギリシア語と古典ギリシア語との距離は、現代日本語と平安古文のようなものと説明する。たとえばギリシアの大学入学統一試験では、トゥーキューディデース『戦史』やアリストテレス『ニコマコス倫理学』などから原文が挙げられ、それを現代語に訳せなどという問題が出される。

現代ギリシア語には二つの流れがある。一つはカサレヴァーサ（純正語）で、もう一つがディモティキ（民衆語）である。ご存知のように、ヘレニズム期

にギリシア語はコイナー（共通語）となり、キリスト教ローマを経て、ビザンツ帝国の公用語となった。現代ギリシア語のデモティキはコイナーまで遡及することができる（跡形もない古典語の口語との関係は不明）。ギリシア人は、長い間、自らを「ローマ人」と称し、言葉を「ローマ語」としていた。これが英語で現代ギリシア語を指す Romaic の由来である。そこには異教古代との断絶、ローマ市民としての意識が込められていた。4世紀にわたるトルコ支配下でも民衆語は引き継がれ、文書でも教会が中心となりギリシア語は保存された。ウィーン体制をゆるがせた独立後、古典ギリシア語との結びつきを重視するファナリオース勢力（かつてトルコ政府の重鎮だったイスタンブル在住のギリシア人）が、古典語を利用しながら、デモティキからトルコ語などの外来語を除去し、文法的な乱れを「純正化」して、人工公用語カサレヴーサを作り上げた。多くの方言に分かれていた口語を取りまとめる標準語としようとしたのだが、いかんせん人造語である。

1967年にパパドプロス大佐のクーデタで始まった軍事政権はカサレヴーサを強制した。政権が崩壊した後、激しい議論を経てデモティキを公用語とすることが決められ、これが、こんにちでは深く浸透している。しかし、一部極右の新聞などはカサレヴーサを用いているし、わざとカサレヴーサで重々しく話す政治家もいる。

ギリシア語の知識が増加したルネサンス以降の学問（医学など）では、学術用語・専門用語に、ギリシア語が用いられる比率が高まり、その意味では今なお世界中に影響を持つ言語である。

### 移民問題

客人好きのゼウス（ゼウス＝フィロクセニオス）の末裔だけあって、一般的にギリシア人は外国人に対する偏見や差別意識は持たない。ところがこの数年来、隣国アルバニアのみならず、パキスタン、バングラデシュ、ケニア、中国などからの難民、移民が大量に流入し、ギリシア人のやりたがらない3K仕事や外国製品の販売に従事するようになった。ほとんどがまじめに働いているし、特に東欧系の人々はギリシア語もすぐにマスターして仕事も丁寧なので重宝がられている。ギリシア文化を賞賛し、『その男ゾルバ』のように、ギリシア人にカルチャーショックを感じて立ち去っていく観光客ではなくて、異文化を抱えた人々が日常的に共生を始めている。

ギリシア人は、ある種戸惑うとともに、一部にはクセノフォビア（外人嫌い）の兆候も現われている。

### 叙任権闘争？

北部ギリシアやクレタ島、ドデカネス諸島など、独立戦争以降にギリシアに編入された領土にある教会には、コンスタンティノープル総主教（まだいたというのが正直な感想かもしれない）が一定の権威を行使する。現在ギリシア共和国内にはこの新興教区を含めて80の司教座があり、さらに全体を統括するアテネ大主教座が加わり、81名からなる教会会議が形成されている。

今年の夏以来、北部ギリシアで3名の司教が死亡して欠員が生じたことから、その後任人事をめぐって、フリストドゥロスアテネ大主教とヴァルトロメオスコンスタンティノープル総主教（在イスタンブル）との間に激しい対立が生じた。後者は、ディアスポラのギリシア正教会の全教区に権威を持ち、ギリシアの新興教区にも「1928年協定」にしたがいない任命権を留保している。今回、アテネ大主教側が、「自身が捕囚された身の総主教が自由市民を保護することはできない」として、この任命権をもぎ取ろうとした。ギリシア内の司教にも反対があり、連日のように司教たちのインタビューが放映されていた。コンスタンティノープル派の司教の一人は、あの黒ずくめ髭もじゃの風体で「ファナーリ（灯台の意、コンスタンティノープル総主教座のこと）は、この世を照らす光だ。わしゃファナーリとこの腕に刺青を入れたいぐらいだ」と答えて笑わせていた。この問題、必要な票数を集められそうもないことが判明し、アテネ大主教が取り下げる形で決着を見た。

イスタンブルには約2000人のギリシア人コミュニティがあるが、トルコ政府は総主教にトルコ国籍を条件付けていて、むしろこのことの方が総主教座の存立を危ういものとしているといわれる。

とりとめもないことを書き連ねたが、EU内でも低開発国扱いのギリシアで暮らして、世界2位の経済力を持つ日本に帰ってきて、豊かさを実感できないのはどういうことだろうか。一人当たりの野菜消費量世界一、果実から採る稀有なオリーブ油をふんだんに取り、ほどほどに働き、親密な家族と友人との生活をエンジョイする、これが平均的なギリシア人のシンプルライフである。

来年の夏あたりエーゲ海の島の民宿で、垣間見たいかがでしょう。